

父はひょうご



國方學

寝がえりをうったら頭部がゆれ、かるい頭痛を感じた。肩もこっている。のみすぎたらしい。

もうすこし眠れば治るだろうと、夜具をアゴまでひきあげたとき、違和感をおぼえた。いつもの掛けふとんとちがう。それでも目をつぶったが、ベッドのきしみが硬い。枕も頭に合っていない。

バチツと目がさめた。こめかみの奥がかすかに痛む。手をのばすと畳にさわった。ベッドじゃない、ふとんだった。

ここはうちではない。自分の寝室とはちがうところで寝ている。おどろいて上半身をおこした。

うす暗い空間で、壁だけがまじかに迫ってくる。三畳くらいか。上方にある明かりとりの窓から弱々しい早朝の光がさしこんでいる。その光にあぶり出されて、白く丸いものが前方に見えた。瑠璃びきの用具のようだが、なんだろう。しばらく注視する。

便器だ。洋式便器がこのせまい部屋の中にむき出しのまま置かれている。もしかして、ここはトイレの中か。そんな所でおれは寝ていたのか。

ちがう。そうではない。トイレにしてはこの畳敷きは広すぎる。いったいここは……。

ふとんをはねのけ、起き上がろうと膝を立てたとたん愕然となった。いつのまにかパジャマを着ている。それも着なれた自分のものではなく、上下衣とも黒とグレーの横ジマ。まるで囚人服だ。

ひきちぎるように脱いで、においをかいでみる。異臭はしない。洗剤のかすかな香りとあとは自分の体臭。

だが油断はできない。ねこみたいに注意深く、ゆっくりとまわりを点検する。

天井近くの壁面に四十センチくらいの四角い窓が二つ並んでいる。すりガラスの上には外は網戸があるらしく、うすい光は射しこむが外部の景色は見えない。ただ、スズメかなにかが飛ぶ影がよぎった。

三畳の畳敷きのむこうは板の間になっていて、そこにむき出しの便器と小さな流

しがある。流しには蛇口がひとつ、青サビの浮いた長めの鉄管が垂れ下がっている。その上に十センチほどの棚があつて、黄色いポリ容器やピンクのスポンジたわし、タオルなどが見える。食器洗いの用具だろうか。

流しの横の壁にほうき、チリトリ、はたきの三つが並んで掛けられている。いまだきめずらしいおそうじ三点セットだ。

天井にはめ込み式の照明があるので、どこかにスイッチがあるはずだと、壁やコーナーを目でずっと追うが、どこにもない。そのかわり、壁の一角に埋め込まれた布張りのスピーカーのようなものを発見した。

立って部屋をぐるり見まわすのだが、周囲の四面すべてが壁で、入り口らしきものがない。おかしい。これではおれはどこからここへ入ったのか。

手でさわりつつ、仔細に調べると、板間の部分の一面がなにかおかしい。ここだけが壁面ではなく板戸のようなのだ。だがドアノブとか引き手がないので、もしここが入り口だとしても、こっちは開けられないことになる。忍者屋敷のどんでん返し？ まさか。

この板戸には、目の高さぐらいの位置に四角いのぞき穴のような切れ込みが作られている。なんだろうとのぞいてみるが、外側に防護板があつてもこうは見えない。

さらに膝ぐらいの位置に、こちらは五十センチ四方ぐらいの窓のような細工がある。窓といってもガラス張りになっているわけではなく、スライド式か観音開きかの鉄板にふさがれている。

両掌を吸盤にして戸をスライドさせてみた。少しぐらつくが、開きはしない。肩で押しても、鉄板の冷たさが伝わるだけ。拳でたたいてみたが、にぶい音がして手が赤く痛んだ。

おれはそのままずると膝を折り、床に手をついた。

監禁された。そうにちがいない。

なんでこのおれが監禁されなければならないのだ。これは拉致か。おれが会社とか国家の重要機密情報を握っていて、敵のシンジケートにつかまったとでもいうのか。ばかな。

アッ。

とつぜん、ゆうべのことを思い出した。

きのうは金曜日。仕事がおわって会社の近くで同僚といっばいやり、そのまま帰

ればよかったのに、ひとりでなじみの焼酎バーにむかった。妻の女ともだちが夫婦でやっている店で、最初は女房にひっぱられて行ったのだが、顔をおぼえてからはひとりでも利用するようになった。

ともだち感覚の店なので、週末でもあり、女房がいかに鬼嫁かを酒の肴に、つい酒量を過ぎたかもしれない。こどもがふたりできてから、家庭内でのおれの地位は日に日に下がるばかりなのだ。

いつごろ店を出たのか憶えてないが、終電にはまだ余裕があったと思う。途中、舗道でよろけるとか、他人に迷惑をかけるほどの深酒ではなかったはずだ。

そうだ。焼酎バーからまだ百メートルぐらいの、セントラル公園の脇道のところだ。樟の大木の枝が歩道に覆いかぶさって、街灯の明かりがさえぎられたあたり。そこでおれは呼びとめられた。

「大野靖雄さんじゃないですか」

相手はふたりいた。暗くて顔は見えない。店の呼び込みとか物盗りをするような物言いではないので、

「そうだけど、だれ？」

と、こたえた。声がだれか知った人に似ているようにも思えたのだ。

「わたしですよ」

いかにも親しげな調子で寄ってきて、ふたりがおれの両腕をとった。とたんにからだが宙に浮き上がった。相撲か柔道か、格闘技できたえあげた松根のような太腕だ。自分がどうなっているのか、とっさにはわからない。そのまま、すぐ近くに止めてあったミニバンにつれこまれた。

あまりにとつぜんのことで、「アッ」と思ったきり声が出ない。全身で抵抗しただろうが、仔山羊を扱うようにあしらわれた。助けを求めて大声を出したつもりだが、その声が車外にもれることもなく、夜の巷をみじかい時間走っただけで、建物の中庭風なところにつれこまれた。

またふたりの男にごぼう抜きされて、部屋に入った。スチール椅子に押しつけられ、恐怖と怒りで喉がつまりせきこむ。さし出されたコップの水をのんだのだが、それから後の記憶がないということは、あの水になにかかけがあったのだろう。

酔っぱらいをひと晩とめおくトラ箱か。それにしてはこの処置はきびしすぎる。ちかごろ少なくなったとはいえ、あのくらの酔漢はどの町でも見かける程度のも

のだ。

さっぱりわけがわからない。

おれはもう一度ふとんにあお向けに寝て、天井をじっと見つめた。わけがわからないが、安堵できるものはなにもない。むしろ、不気味なだけに心配しだすと、恐怖の心は脈を打つごとく増幅してくる。

なにかが動いた気がしてふり返ったら高窓に映った野鳥の影だった。いつの間にか陽は高くなったとみえ、さしこんでくる光の色がさつきとはちがっている。

何時だろうと袖をまくるが時計がない。そういえば携帯もない。煙草もライターもない。みんな取り上げられた。

いきなり、壁のむこうからピアノの音がきこえてきた。クラシックのピアノ曲のようだ。隣室で弾いているのかと思ったらそうではない。壁にはめこまれたスピーカーからの音だった。

しばらくしてやんだが、その音楽が合図だったかのように、周囲のなにかが動きだす気配が壁越しに感じられる。はっきりした物音や話し声ではないのだが、それまで眠っていたものが急に起きたみたいなのソワソワした気配。

なんだろう。

そうか。人がいるのだ。仲間か。ここにはおれと同じように、捕らわれてきた者たちがいる。いまのピアノが起床の音楽だったのだ。壁のむこう側には同じような境遇の人たちが何人もいるにちがいない。つまり収容所。そうだとわかると、少しだけ気持ちが悪く着いた。

だれにいわれたのでもないが、おれはふとんをたたみ、流しで顔を洗った。きつとどの部屋でもそうしているだろうと、ほうきで床を掃きもした。

チリトリを使っているとき、背後でだれかに見られている気配を感じ、ふりむくとのぞき窓に目玉がふたつ並んでいる。アツと思い、近付きかけると小窓のフタがぱたんと閉じられた。やはり監視されている。

やがてスピーカーからこんどはバイオリン曲が流れだした。すると、配膳車のかちかちや鳴る音とともにみそ汁のにおいが、どこからともなく漂ってきた。朝めしだな、と思ったところへ、のぞき窓の下にある大きめの窓が開き、そこから食器ののったお盆がいきなりさし込まれ、板間に置かれる。はたしてそうだった。

まだ湯気のたつお碗に具だくさんのみそ汁、もうひとつの碗は具入りの玄米がゆ

なのか、茶色っぽいかゆ状の中に豆や雑穀などが混じっている。脇の小皿にはなすの漬物とノリの佃煮が添えられ、空の湯のみがひとつ。

流しの下に折りたたみ式の小机があったので畳の間にセットし、朝食の食器を並べて、その前に正座してみる。こういった集団生活では食前のことばとか、祈りみたいなものをやるのだろうか。それとも、どこから号令だの「いただきます」の声などが流れてから、一斉に箸をとるのか。

正座の姿勢のまましていると、のぞき穴からふたたび目玉があらわれ、すぐに下の窓口があいて、ポットがひとつ板間に置かれた。そして外から「食べていいぞ」という声。

日本語だ。

こんなことがなぜかうれしかった。

みそ汁をのんでみる。朝食にみそ汁なんて何年ぶりだろう。ふだんは食べなかつたり、食べてもパンと牛乳がせいぜい。汁があまい。とうふや油揚げのほかに根菜類がどっさり入っていて、それらからのダシも出るのか、汁全体がほのかにあまくてうまい。

ひと口のみそ汁で気持ちがうんと柔らかくなった。さっきの日本語といい、このみそ汁といい、自分が日本人であることを痛切に自覚させられる。

おかゆはまずくはないが、色が色だけになんだか糠っぽく感じられる。白がゆならまだしも、豆や雑穀などの異物が気になる。巷でよくいう「くさいメシ」とはこういうものかもしれない。

すべての量がそれほど多くはないので、出されたものを完食して、ポットのお茶をのむ。音をたててすすりあげたとき、とつぜん腹の中で胃袋がひっくり返った。こみあげる嘔吐感。左手で口を押さえ、右手でトイレのふたをはねあげ、食べたものをみんな吐き出す。

ゆうべの深酒のせいか、食べ慣れないものを口にしたせいか、精神的ストレスのせいか、それとも今すすったお茶の漢方薬のような匂いのせいか。たぶんその四つが全部合わさったのだろう。便器に顔をつっこみ、背中を波うたせて、胃の中のものすべてを吐き出した。

とそのとき、背中に温かいものを感じる。いつの間に入ってきたのか、だれかが背中をさすってくれている。

ぜーぜーいいながら顔を少しかたむけると、「だいじょうぶか」と気遣ってくれる男の声がした。涙目をしばたいて礼をいおうとしたら、うしろのドアが大きく開いているのが見えた。

ドアがあいている。

一瞬、脱走、ということばが頭にうかんだ。男より先に外に出、ドアをしめれば中からはあかないはずだ。できないことではない。

だが勇気がない。思うだけで足が動かない。

流して口をすすぎ、タオルで顔をふいていると、男の大きな背中が目の前にあった。その横に廊下があり、向かいの部屋のドアが見てとれた。「いまだ」という声がきこえた気がした。

ドン！

おれは頭から男の背中に体当たりし、横っ飛びに通路に出てドアをしめた。あとは夢中で走った。

通路にはだれもいなかった。通路の両側にドアがある。ドア、ドア、ドア。ドアがずらーつと並んでいる。つきあたりは壁のようだが、そのコーナーには階段か出口があるだろう。すべりそうになる床面をけておれは走った。

いきおいがつき過ぎて壁にぶつかりそうになったとき、横からひよいと手がのびて、衝突をくいとめてくれた人がいる。松の根つこのような太い腕だ。

「廊下を走っちゃあぶないよ」

保育士が園児にいうような注意をうけた。ゆうべの謎の工作人員にちがいない。もうだめだ。

力がぬけた。その場にへたりこむ。

廊下の両側にならんでいるドアの奥から、「ハハハ」という高笑いの声があった。食器を鳴らすカチャカチャという音もきこえる。おれの脱走劇を見ていたみたいに。

「だめだよ、こんなことしちゃ」

別の声がある。さっきおれの背中をさすりながら「だいじょうぶか」ときいてくれた男の声だ。部屋の中からでもこの男はドアをあけられるのだろうか。

「この人はあなたの担当だよな」

太い腕でおれの襟首をつかまえている男が確認している。

「事故になるから逃がしちゃだめだよ」

「すみません。やっぱ、反省室ですか」

「規則ではそうなってるな」

襟首をつかむ腕が松の根から担当の男にかわった。腰のゴム紐をもって立たされ、そのままぐいぐい押し出される。

みじかい渡り廊下を通って、別棟の建物につれこまれた。渡り廊下からちらりと外を見たが、外界の様子はわからない。部屋の高窓からは晴れているのか曇っているのか判然としなかったが、空はやはり梅雨時らしい雨雲に覆われている。

別棟の建物の入り口の上には「反省室」と書かれた白いプレートが見えた。

プレハブ造りの作業場みたいな建物で、床はコンクリートのたたき。窓はひとつもない。場内はいくつかのブースに仕切られていて、おれがつれこまれたのはいちばん手前のスペース。動物園の檻みたいになっている。

「おれもこんなことしたくないんだけどさ」

担当の男はそういういながら、檻の奥の壁にぶら下げられていた革具を手にとった。じゃらじゃらとした金具がついていて、いかにも重く頑丈そうだ。

とつぜん、はらわたを引きちぎるような粘着性のあるバッチイーンという刺激音が建物全体に響きわたった。すぐに「ヒーツ」という絶叫が追いかける。

「いちいちヒーツいうんじゃねえよ」

ドスのきいた女の声だ。別のブースのできごとらしい。

「またあいつか」

担当さんがつぶやく。

バッチイーン！

「ヒーツ」

鞭で打たれているのではないだろうか。そう想像したとたん、おれの体がふるえだした。ここは反省室という名の拷問部屋——。

「だいぶメタボだな。でも、これを使うとすぐなおるよ」

おれの腹をさすりながら、担当の男が重い革具を引き寄せた。ひよっとしてこれは皮手錠というやつではないか。

いつか新聞で読んだことがある。どこかの刑務所であれば囚人を鎮めるために皮手錠を腹に巻き、きつくしめすぎて内臓破裂で死なせてしまった事件。

「た、た、た……」

ものをいおうとしても歯がかみ合わない。

「た、た、担当さん。た、た、たすけて」
バッチイーン！

「ひえーっ」

となりの鞭の音に、打たれてもいないおれが声をあげていた。もう、漏れそう。

「だいじょうぶ。ちょっと巻くだけだから」

腰をぐっと引き寄せられた。

「ひっ」

腰がくだけて力が入らない。くの字になって、手だけ檻の入り口の方へのぼし、二、三度空を搔く。そこへひよっこり、まるで呼び寄せたように神父さんがあらわれた。

こういう場所では教誨師とでもいうのだろうか。黒いシャツに白い割烹着のようなガウンを身につけ、丸帽をかぶっている。手には分厚い皮表紙の聖書を持ち、外光を背にしてこちらを見つめていた。

おれは死にもものぐるいでたすけを求めた。

「これこれ。乱暴はいかん」

「あ、先生」

男がふりむいて手をゆるめた。その手を振りはらって、おれは神父さまにすがりつく。

「おた、おた、おた……」

「はいはい。わかりました。もういいですよ」

抱きかかえて背中をたたいてくれる。ガウンの裾からハッカのようなナフタリンのような匂いがした。

「でも、脱走を試みた者は反省室で反省することになってるんですけど」

担当の男が不服げな口調でいう。

「反省はわたしの方でやらせますから。さあ、あなた。こちらへいらっしやい」

またどこかへつれていかれるのだろうか。やさしそうなことをいっておいて、実はもっと残酷な水責めのプールとか、石抱きの砂場とかではあるまいな。

神父さまは話しかけるときは目を細め笑みをうかべ、とろけるような表情になるが、黙っているときは口を真一文字に結び、薄目の奥からすべてを見通すみたいに黒目を冷ややかに光らせる。

おそろおそろついて行く。また、渡り廊下に出た。曇り空からぼつりぼつりと雨が降っている。きょうも一日雨らしい。

着いたところはさつきまでおれがいた部屋だ。

「お座りなさい」

柔和な声でいわれた。安心した。机をはさんで対座する。説教でも始まるのだろうか。でも、どんなに叱られても、この人ならこわくない。

さて、という風に、顔の表情を謹厳の渋面から慈悲の笑顔に変化させて語りかけた。

「いまのあなたの心は不満でいっぱいでしょ。なぜ自分がこんな所にいるのか。どうしてこんな目に遭うのか……」

おれははげしくうなずいた。

「自分はなにも悪いことはしていない。悪いのはあいつらだ、と」

やっぱり話のわかる人だ。冤罪を訴えるおれの眼差しを柔らかくに受けとめていた神父の目が、いきなりカッと見開かれた。

「はたして本当にそうか！」

閻魔の雄叫びのような声。その声がせまい部屋で何重にもだぶってきこえ、耳の中でいつまでもこだましている。

胸震いした。仏の顔から鬼の顔へ。この変面劇の方が心底こわい。

またもや神父は慈愛に満ちあふれた微笑をたたえ、ガウンの下から一冊のノートをとり出した。表紙に懺悔録と書かれてある。

「ここに、この文字を百万遍、書きなさい」

そういって、見本を示すために一ページ目にさらさらと一文を書いた。

——汝、悔い改めよ——

「ひやく まん べん」

力なくつぶやくおれの声を耳にしながら彼は立ち上がり、もう一度「百万遍」といってから、見張りの男を呼んで解錠して出ていった。鉄の扉の閉まる重々しい音が腹わたに響いた。

焼酎バーでのもんでいると、妻がふたりの子どもをつれてやってきた。ちえつ。こんな所へつれてきやがって、と舌打ちする。

「やっぱりここだ」

五歳の秀也が幼児特有のかん高い声をあげながら店にとびこんできた。そのあとに二歳の美咲が「おとしちゃん、おとしちゃん」と連呼しながらついてきて、練乳ミルクが粘りつくように甘えてすがる。妻はさっそくともだちである店のママさんとおしゃべりを始めた。

「おとしちゃん え かいて」

膝にのった美咲が焼酎グラスを手ではらいのけながらいう。

「だめ。ぼくとじゃんけん勝負をするの」

秀也の声はなんでこうも脳天につきささるのだろう。じゃんけんで負けてやらな
いと、引き付けを起こしてのように悲鳴をあげて泣きだした。

「これ おかしゃんの かお」

いつの間にもちだしてのか、美咲がマジックインキでカウンターにぐちゃぐちゃ
の絵を描きつけている。

「もう、おまえたち、ダメでしょ」

つい声を荒げて注意する。

「だめくない。だめくない」

美咲は平気で、壁にまで絵を描き広げる。

「おとしちゃんの ばかあ」

負けてくやしい秀也が地団太ふんで泣き叫ぶ。

「おい。なんとかしろよ」

呼びかけるが、妻はともだちのママさんと話しこんだまま返事をしない。

「オイ。なんとかしろって、こいつら」

思いきりとなりつけて、やっとこちらに振り向いたその顔には、目も鼻も口もな
かった。「げえ。ノッペラボー」とのけぞったところで目がさめた。

懺悔録の上にうつ伏せて寝ていたようだ。

百万遍書かねばならない——汝、悔い改めよ——はまだ三ページにしかなくてい
ない。ため息をついて胸ポケットをさぐった。ない。ズボンの方もたたいてみるが、
どこにもない。

ああ、吸いたいなあ。

ないとなるとよけい吸いたくなる。ここから出たら、二、三本いっぺんに口にく

わえてやるぞ。そんなばかなことを考えるが、なんの足しにもならない。

しかたがないのでポットのお茶をのむ。やはりムツとくる。食べたばかりの朝食を吐き出したのも、この独特の匂いのせいだ。いろんな薬草が入っているのだろう。おそろおそろ二、三口ふくんでみる。

フーツ。

座りなおして、またペンをとった。

時間はあるので、一字一字ゆっくりと書いていく。やったことはないが、写経と
いうのもこういうことなのだろう。

—— 汝、悔い改めよ ——

—— 汝、悔い改めよ ——

秀也はなにかいいだしたら自制できないところがある。保育園で先生に多動症の疑いがあるといわれたらしい。自分の欲しいもの、やりたいことを止められると引き付けを起こす。金切り声をあげて泣き叫ぶ。同じ園児や先生にすれば迷惑の子どもだろう。父親のおれでさえ正直手をやく。

そんなとき、妻は息子を静かな所へつれていき、だまって抱きしめる。背中をさすり、だいじょうぶ、だいじょうぶと耳元でささやく。すると間もなく発作はおさまる。その行為がおれにはできない。無理にやると息子はのけぞって、後頭部をぶつけようとする。

その点、美咲はおとなしい。おにいちゃんのようなわがままはいわない。そのかわり頑固だ。絵を描かせるとマイ・ペースでとん描きつづける。もうやめなさい、といっても自分の気がおさまるまで描く。

あの子たちはいまどうしているだろう。とつぜん父親が帰ってこなくなって、心配しているにちがいない。泣いて母親を困らせているのじゃないか。

思えば、子どものことはなにもかもみんな妻にまかせきりだった。育児も食事もしつけも彼女がみなやった。おれがやるのはたまたま風呂に入れるくらい。

—— 汝、悔い改めよ ——

—— 汝、悔い改めよ ——

夢で見た妻の顔がノッペラボーだったのはどういう意味なのだろうと、写経しながら考える。目、鼻、口、顔の造作がない。だから表情がない。

そういえば、このところ彼女の顔をじっくり見たことがなかった。喜んでいるの

か、悲しんでいるのか、怒っているのかもわからない。仕事が忙しいということもあって、家には寝に帰るだけみたいなもの。顔を見ないのだから彼女がノッペラポーなのも仕方がない。

つい先日、ささいなことでもいさかきをした。夏休みに家族旅行でディズニー・ランドへ行きたいという。わけもわからないのに、子どもらが躍りあがって喜んでいいる。あんな人ごみの中へこの子らをつれて行くのを想像しただけでぐったりした。「おれはひとりどころか静かなところへ行きたいよ」

ついポロリと本音を吐いた。

「あ、そ」

ドキリとするほど冷ややかに妻がこたえ、それっきりなにもいわなくなった。

にわかには尿意を催してトイレに立つ。便座をあげてパンツをおろそうとしたが、真横にのぞき穴があることに気がついた。放尿中、横からのぞかれることを想像すると、あまり気分のいいものではない。見回すと、便器のうしろの壁に小さな衝立があるのを発見した。これを立てかけて便座に腰かけると、腰から下はかくれる。つまり、房内では立ション禁止ということに気づかされる。

水を流して立ちあがると同時に、スピーカーから女の声が聞こえてきた。

「さあ、午後のラジオ体操の時間です。みなさん、用意してください」

華やいだ女声にもおどろいたが、そのあと軽やかに流れ出したおなじみのピアノの曲を耳にすると、自然にからだ動き出すからふしぎだ。

「ラジオ体操オー、だいいちイー」

まずは背伸びの運動から。せまい部屋の中で、それでも思い切り背伸びをすると気持ち少しは浮き立ってくる。ほかの部屋でもみんな一斉に手足を動かしているのだろう。床がきしんだり、トントンはねる音が聞こえるようだ。

体操がすんでもそのまま軽快なリズムのピアノ曲はやまず、曲に合わせてその場での足踏みをうながされる。手足を大きくあげて室内ウォーキングをしていると、うっすらと汗をかいてきた。

ポットのお茶をのむ。運動のあとなので、なんの抵抗もなくのめる。この味にもだいぶなれてきたのか。本当はこのあと一服したいところだが、お茶でなんとかごまかせるようになった。

——汝、悔い改めよ——

——汝、悔い改めよ——

また写経をつづけていると、こんどはのぞき穴から声がして、「風呂に行くから仕度をしなさい」という。これはありがたい。

流しにあるタオルと石けんをもって正座をして待っていると、ガチャガチャと重みのある金属性の音がしてドアがあいた。担当さんとあの松根腕の看守さんが立っていた。サッと緊張がはしる。いちど「脱走」の前科があるので、ふたりがかりで警備をきびしくしたのか、それともナチスのアウシュビッツのように、風呂と偽ってガス室にでもつれ込む気か。

前後をかためられて通路を進むと、つきあたりの角部屋に案内された。ここもいちいち鍵をつつこんで、解錠してからドアをあける。中にはいると板張りの脱衣室があり、そこで担当さんから使い捨てのカミソリを渡される。

「これは使ったら捨てずに必ず返却すること。湯に入るときは前をよく洗うこと。入浴時間は十八分。三分前になったら知らせるから」

とくに威圧的でもなく、淡々と説明する。感情は読みとれないが、悪い人ではない気がしてきた。

浴室に入るとムートーとした温気とともに、どこか懐かしげな匂いがした。浴槽はタイル張りで、広くはないが狭くもない。が、張ってあるお湯が透明ではなく、うす茶色をしている。

肩までどっぷりつかってからわかった。この風呂は薬草湯なのだ。入浴剤ではなく、湯舟の底にネットに包まれた薬草がころがっている。そのせいか、ぬるめの湯なのに、しばらくすると顔に汗がうき出てきた。

「ああ……」

自然と声が出て、ざぶりと顔を洗う。気持ちいい。三分前に声をかけてくれるというので、それまでのびのびと湯につかる。緊張やストレスがいつぺんに雲散霧消していく。

薬効を保持するためにシャワーは使わず、そのままからだをふいて退出した。部屋にもどると冷えたビールではなく、ポットのお茶をのむ。うまい。もうこのおいはぜんぜん気にならなくなった。

昼食が少なかったせいもあるが、運動のあとの入浴で空腹が底をつきかけたころ、

バイオリン曲とともにガチャガチャと配膳車の音が聞こえ、とたんに生つばがいで湯のように湧き出てきた。夕食がこんなに待たれたことは近来ない。

ふだんなら、退社したらまずビールだった。夕刻の空腹が求めるのは飯ではなくアルコール。だがここではまずメシだ。酒はハナから除外されている。こんなところでのめるわけがない。

とはいえ、一縷の望みをもって受けとった配膳盆に、酒はやはりなかった。煙草もとられているのだから、あるわけがない。

それでも夕食はおいしかった。焼き魚、季節の野菜と豚肉の炒めもの、根菜や海藻類の煮もの、旬の夏野菜とチーズのサラダなどと七分突きの玄米飯と汁。出始めの甘瓜一切れも添えられている。もう十分だ。

食後はスピーカーからイージー・リスニング音楽が流れてきた。快適というわけではないが、しだいにリラックスしている。学生時代のせまい1DKアパートを思い出す。あれにくらべれば、食事の内容は数段いい。

ただ、テレビもなく、新聞も雑誌も本もない状態で時間を過ごし、きちんと眠りにつくことができるか。それだけが心配だった。だが、就寝時間になり、室内灯がフェード・アウトされると、ごく自然に眠りにおちていた。

何時間寝ていたのだろう。時計がないのでよくわからないが、八時間ぐらいはぐっすり眠った感じだ。酒なしで眠れるかなと心配していたがとんでもない。人間とは強いものだ。こんな劣悪な環境の中でも生きていける。むしろ、のまなかった分、寝起きがスッキリしている。いつもはもっと頭が重く、そこへ煙草のケムリをぶちこんで、やっと脳を覚醒させるのが習慣になっている。

このおれでも、酒なし煙草なしでもやっていけることを感得したのは大きな発見だった。

朝食をとる。きのうと大差ないメニュー。でも、きょうは糠っぽいオジヤのような玄米がゆも全部食べ、ポットのお茶をのんでも胃腸がひっくり返ることはなかった。

流しで食器を洗い、菌もみがき、衝立を立てて排便もすませて、また机にむかう。

——汝、悔い改めよ——

——汝、悔い改めよ——

ここから解放され、家に帰ることができたら、まず第一に子どもたちを抱きしめ

よう。そして、妻の顔をじっと見つめるのだ。もうノッペラボーにはさせない。ディズニー・ランドでもどこでもつき合うよ。

写経をしている最中ずっとそのことを考えていた。仕事は変えられても、家族を変えることはできない。どういいういきさつでこんなところに監禁されたのかは不明だが、家族や自分の健康のことを考えるようになったのは進歩といえようか。

ヨーグルトとフルーツという簡素な昼食をとったあと、少し眠くなったので横になっていると、ドアを解錠する鍵の音がした。あわてて起き上がり、正座して待つ。担当さんが入ってきた。

「所長がおよびです。すぐ行くように」

奥歯をキツとかみしめた。いよいよきたか。取り調べでもするのだろうか。誤認逮捕であることを主張しなければならぬ。丹田に力を入れて立ち上る。

反省室ではない別棟の建物につれていかれる。小部屋に入ると女の刑務官がいて、衣装カゴを差し出す。

「ここで着替えます」

見るとおれのスーツだ。下着は洗濯され、ワイシャツもプレスしてある。小物の財布、携帯、煙草の類いもきれいに並べて置いてある。留置所というのはこういうものなのだろうか。ともかく、横じまの収監服からビジネス・スーツに着替えると、元の世界にもどった気がした。ヨシッ、やるぞ。

となりの部屋に入る。

所長室なのか、取り調べ室なのか。特別かわった造りではないが、正面の大机の前に精悍なイガ栗頭の男が、口を真一文字にむすんでおれを見すえていた。思わず身がすくむ。

「わたしが当ホヨウ所・所長の神保です」

低くくぐもった声でそういう。

……ン、ン？　なんか変なことをいったぞ。

いわれた意味がよくわからなかったが、所長は眼下の書類に目を通しながらつづけて質問した。

「あなたの名前は大野靖雄。四十三歳。株式会社・城北商事・第二営業課長。家族は妻と一男一女の四大家族。まちがいありませんね」

「あ、はい」

認定尋問とでもいうやつか。たぶんそういう種類の質問なのだろう。だったらここでキチンとっておかねばならない。

「で、でも、ちがうんです」

「ん？ なにがちがうのかね」

所長がジロリと片目を上げた。心臓がドクンと波打つ。しかし、いまがんばらねばおれは冤罪にされてしまう。背筋を立て、声を励ましていった。

「わ、わたしはなにもしていません。悪いことはなにも……」

冷ややかに片目でじつとにらんでいた所長の顔がフツと上向き、そのとたん入れ歯をはずして口をクシヤツとさせた好々爺のような表情に変面した。

「ああ。ああ！」

おれは思わず腕をのばしてその顔を指差し、大声でいった。

「神父さま！」

相手は首を横にふりながらにこやかに笑い、一枚のパンフレットを差し出した。

「所長の神保です」

パンフレットには『健康保養所プリズン』と書かれている。

「二泊三日の滞在はいかがでしたか」

ええ？ どういうことだ。体温が脳天から下肢へ急激に下がるような気がした。

「たいへん失礼いたしました。当保養所はお客さまの心と体の健康を考え、外界との接触を一切断って、密室で自分を見つめなおし、シェイプアップするためのさまざまなサービスを提供しております」

さっきまでの強面を柔面に変え、顧客にプレゼンする所長の顔を呆然と見つめていた。が、すぐにおれの血流は氷点から沸点に急上昇した。ここは刑務所でも留置所でもない健康保養所だという。お客の心と体の健康を考え、サービスを提供するところだという。

「なにがサービスだ」

ふざけやがって、と所長の胸倉につかみかかった。それを担当さんと女刑務官、と思っていた男女がとめにかかる。

「きちんと説明しろ。訴えるぞ」

羽交い絞めされながらもおれは叫んだ。こんなことをされて、「冗談でした」で済まされてたまるか。

ごもつとも、と何度もうなずいて、所長が口を開いた。

「生活習慣というのはなかなか頑固なものでして……」

まず、お茶や玄米がゆの中身から説明しだした。お茶には、どくだみ、びわの葉、スギナ、ごぼう、ゴーヤー、生姜、うこん、はぶ草、高麗人参などが入っており、おかゆには、玄米、小豆、クコ、大豆絞り汁、オクラ、麦こがし粉が混じり、血行促進、血管拡張、肝臓増強、快眠快便……。

「もういい。酒も煙草もとめられて、体にいいことはわかった。しかし、なんで拉致されなきゃならんのだ。ここにくることをおれが頼んだか」

声を荒げてなおも抗議した。理不尽なあつかいをされ、放っておくことはできない。すると、百面相の所長はクスリと鼻先笑いをしていった。

「奥さまですよ」

「ん、ん？ 女房が？」

声が裏返って頭の先に抜けていく。女房がどうしたというのだ。

「本来ここへはお客さまご自身の意思でこられるのですが、たまにご家族からのご依頼で、大野さまのようにサプライズ入所される方もいらっしゃいます」

「サプライズ入所？」

おれをとりかこむ三人が憐れむようにうなづく。

腰からガクンと力が抜けた。

もてあそばれていたのだ。手づかみで頭の中をかきまわされるみたいな混乱の中、ポケットの携帯がとつぜん鳴った。家からだった。

「おとしちゃん、おとしちゃん」

娘の声が出た。とたんに鼻の奥がつまり、涙腺がゆるみかける。

「美咲、元気にしてたか」

掌にくいこむほどに携帯をにぎりしめた。まるで大震災でばらばらになった家族のようだ。

「おとさん」

こんどは息子にかわった。

「おお、秀也。無事だったか。おとさんはだいじょうぶだぞ」

こっちは遭難した感覚でしゃべっているのに、子どもたちは旅行にでも行っているような気で話している。

「おとさん、どうだった？　ひとりでのんびりできた？　父の日のプレゼント」

「え？　なに……」

ふたたび腰がくずれた。そういえば、きょうは父の日だっけ。

「ああ。もうサイコーだったぞ。こんどは家族みんなでこよونا」

精いっぱい無理をしてこたえた。

ヤッター、ヤッター。子どもらのうれしげな歓声が耳の奥で反響している。

そういえば思い出した。ディズニールランドへの家族旅行を提案され、げっそりしたおれが「ひとり静かな所へ行きたい」とつぶやいたときの妻の冷やかな表情を。ちくしょう。そういうことだったのか。

「ふふふ……」

妻の笑い声だ。電話をかわったらしい。

「おい。ひでえじゃないか」

「ううん。秀也じゃない。シャツフルの明美のアイディアなの。あの夫婦もそのプリズンで立ち直ったんだって」

妻はシレッツとしている。シャツフルというのは焼酎バーだ。ともだちとグルになっておれをおとしいれたらしい。

「ばかやろ」

「だって、いきなり緑の用紙じゃかわいそうだって、明美がいうもん」

ええ！　そこまで考えていたのか……。

妻の脳内がまったく読めていなかったことがわかった。これではノツペラボーにもなるわけだ。

「お疲れさん。今夜はあんたの好きなケランチムだよ」

夕食の献立をいいそえて電話は切れた。おれはしばらく動けなかった。

「お客さま。こういうコースもございますので、またご利用くださいませ」

所長が自慢げにパンフのページを繰って示した。

『*ヘルシー・コースⅡ玄米がゆと有機野菜の食事で自然食に親しみ、沈黙考の中で自分を見つめなおそう。』

*シエイプ・アップ・コースⅡ完全絶食と特別メニューの運動でたちまち5キ

ロはやせられる。おなかスッキリ、頭もスッキリ。

*アダルト・SMコースⅡ拷問部屋を特設。網タイツの外国美人が皮手錠と鞭

『であなたを徹底的にいじめます。』

このやろー。ふざけやがって。丸めたパンフで所長の頭をたたこうとしたら、その服装からハツカとナフタリンの匂いがふっと鼻先を流れた。

—— 汝、悔い改めよ ——

独房内で何千回と書いたあのことがよみがえった。あの反省室、あの風呂場、あの食事……すべてはおれのために用意・企画されていたのだ。

「お世話になりました」

自分でも思いがけないことばが出た。所長は滋味ゆたかな笑顔でうなづく。

「お楽しみいただけましたでしょうか」

パック・ツアーの添乗員に礼をいうように握手していった。

「ありがとう。よかったですよ」

健康保養所プリズンから外へ出たとき、習慣的にポケットから煙草をとり出し口にくわえた。火をつけようとして一瞬手がとまる。ちよつと間をおいて、おれは火のついていない煙草を深々と吸った。

梅雨空のすきまから、太陽がちよつぱり顔を出していた。

第10回文芸思潮銀華文学賞奨励賞受賞作品



國方學（くにかた まなぶ）

一九三四年香川県生まれ。一九六六年立命館大学中国文学科卒業。業界新聞記者、高校教師を経て、一九七九年居酒屋「やん八」開店、現在に至る。一九九六年『青い鳥は生きている』（ポプラ社）刊行。名古屋・中日文化センターで名村和実氏の『小説を創る』に在籍。